

大学生のアンケートに見る小中学校期の ノート指導の実態とその成果に関する一考察

齋木久美*・綿引日香里**

(2013年9月17日受理)

Research and practice on elementary and junior high school students' note instruction
On a basis [investigation / to a college student]

Kumi SAIKI and Hikari WATAHIKI

キーワード: ノート指導, 写すノート, 考えるノート,

教育の現場では、学年に応じたノート指導がなされ、授業研究や単元に即した具体的な指導法に関する実践的な研究が行われているが、ノート指導の成果について、検証したものが少ない。また、ノート学習は、学習内容という情報を整理する活動であり、情報処理の基礎技能の育成に寄与しているが、こういった視点でノート指導をとらえようとする研究はあまりない。

授業内容を整理するといっても指導なくしてノートがとれるわけではなく、段階的な指導が必要であり、ノートの使い方、板書の写し方などの学習、また、大事だと思ったことを記録したり感想を書いたりすることなどの学習を経て、自分なりに考えてノートをまとめられるようになっていく。

先行研究によれば、教師は、ノート指導の目的を学習者が思考を整理することと考えていても、実際の指導は、見やすいノートの型を学ばせることにとどまり、その理由として、ノート指導に関する教師間の情報共有が少ないことが指摘されている。そこで大学生を対象に調査を行なったところ、小学校期が「板書を写すノート」が中心であるのに対し、中学校期はメモ欄を活用し「考えるノート」になるよう指導されている実態が明らかになった。しかし、ノート学習が、情報を整理することの基礎能力に寄与しているとの視点での取り組みは充分とはいえないことが推察された。

はじめに

ノート指導は、授業の補助的な活動ととらえがちであるが、小学校から行われる「ノートをとる」という活動そのものは、学習内容という情報を整理する活動である。花田¹⁾は、「基本的なノートの

*茨城大学教育学部 **水戸市立水戸第二中学校

取り方を国語科で指導しておけば、他教科のノートに転移する力となっていくはずである」と述べ、学習者に「工夫したノートを取らせることが、学習の技能になっていることに気づかせたい」と言う。また、藤沢 2 は、「授業中のノートをとるという行為は、教授するという立場から見れば、意図的に生徒に行わせる活動ということになり、生徒が知的情報を受容していくという立場から見れば、生涯の情報処理に対する初期の基礎的な活動として位置づけられなければならない」と述べ、ノートをとることは情報処理活動であると指摘する。大西 3 も「ノート技術は情報活用技術である」と述べている。

つまり、ノート学習が実社会で必要とされる、情報を整理する技能の習得の基盤になっていることになり、ノートに関する学習指導を包括的にとらえ、情報を整理する基礎技能の育成という視点で、実践的研究が推進されていくことが望ましい。

そこで、本研究では、まず先行研究をもとにノート指導のあり方について現状と課題を整理した。そして大学1年生を対象に実施した、小・中学校、高等学校でのノート指導に関する調査をもとに、小中学校期のノート指導の実態を明らかにし、情報処理の基礎技能を育成という視点で、考察を行った。

ノート指導に関する研究とその意義について

宮川 4 は、学習ノートについて、「教科書とともに、もっとも身近なものであり、かつ毎日取扱っているのにも関わらず、軽視されているのか、あんがい研究されていない」と指摘し、教師は、『ノート指導』に対して、深い認識を持ち、その正しい意義を理解し、『ノートのはたらき』に対する正当な眼を開き、『ノートの利用価値』を高めるための研究と工夫をさらに一歩前進させなければならない。」と述べている。

石上 5 は、明治期以来受け継がれてきた「ノート」の意義と機能の生成過程の解明とともに、物的文化の発展という側面を含めた、「ノート」の史的変遷を踏まえることが必要であるとして、ノートの史的変遷に関する研究を行い、現在の学習活動におけるノートが教育の現場に現れたのは、近代教育制度の幕開けと言われる明治初期であり、多くの無名の実践者による実践の集積によってその意義と機能を高めてきたと指摘している。また、今日のノートの意義や機能を論じる際に多く引用されるのが、東井義雄の研究であり、このことについて、次のように論じている。

東井は、それまで「ノート」において目立った指摘がなされなかった「書くこと」そのものの意義とともに、一人一人の思考や主体的な学びそのものを広げたり深化させたりする意義を「ノート」に見出し、それまで一般的に確認されていた「練習」「板書」「備忘」等の機能の他に、新たに「探究」を見出した点、「ノート」の発展に果たした功績は大きい。

そして現代の教育におけるノートについて、石上は次のように述べている。

「ノート」に求められているのは、もはや「学び」に対して、「生きる」という受動的な在り方ではなく、「学び」を「創る」という能動的で積極的に学びに関わっていく在り方である。学びを創る(「ノート」を創ることそのものが学びとなる)「ノート」の在り方が、今日の「ノート」の一つの可能性を示している。

ノート学習を、授業の記録という学習の補助というとらえ方だけでなく、知識や技能を育成する児童生徒の主体的な活動をうながすものとしてもとらえていくべき、ということになる。

大坪・東畑⁶⁾は、ノート指導が、「従来の授業研究を主体とした研究が、単元や教材に依存するものであった」ため、「たとえば板書の活用やノート指導において、教科や学年といった具体的場面に依存しない包括的な研究は極めて少なかった」が、「明らかに教科や単元、そして学年や学校種にさえ依存しない新たな視点の実践研究がスタートし始めている」と指摘する。また、家庭学習のノート指導は、学習内容をとらえ直し理解を深めるための活動であることから、栗原・山下らや草野・山下ら⁷⁾、金澤⁸⁾は、家庭学習におけるノート指導の実践的研究を行っている。

先行研究が報告するノート指導の実態

1 ノート指導の取り組み

ノート指導は、どのように行うべきなのであろうか。ノートをとるためには、段階的な指導が欠かせない。小学校入学後、文字の読み書きの学習をへて、ノートの使い方や板書されたことを書き写す学習に取り組みながら、授業内容をノートにとることができるようになっていく。小学生のノートには、思考、記録、練習といった機能が混在している^{9・10}などため、適度な余白をとって書くことが大事であり、そういった指導が欠かせない。自分でうまくノートがとれない児童に対しては、他の児童のものを例示するなどの働きかけもなされている¹¹⁾。

ノート指導のためには、書く習慣をつけることが大事であるが、手間のかかるものであるから敬遠されるため、書く機会を与えることが必要である¹²など。大磯¹³⁾が指摘するように「板書したものを書き写す作業に終るようなノート指導では、思考が深められず、「思考の筋道がわかるように書かせる」ことや「ノートが資料として活用できる」ように指導することが重要である。そしてノートをとるといふ技能の定着のためには、ノート点検をこまめに丁寧に行うことが必要^{3・14}などである。

またノートは自分が読めればよいから、といった意識でいると、学習したことが整理された書き方になるとはいえないことから、見やすさを意識させるために、「第三者に見せることを想定したノートを作る」といった指導¹⁵なども行われている。

さらに、ノートをとる際に、大事であると思ったことや自分の考えを主体的に書き留めておくことが大切で、学習内容の理解と整理が自分なりに工夫したノートという形であらわされることになるので、児童自身にノートを「考えるための道具である」という認識を持たせ¹⁰⁾、板書以外に気づいたことをノートに書くことができるよう、段階的指導についても報告がなされている⁹など。

2 ノート指導の課題

ノート指導について、さまざまな報告がなされているものの、ノート指導に対し関心や研究が少ないと宮川³⁾は指摘し、ノートの使用のし方が放任されているのは、教師が無関心であることに起因し、教師の意識が課題であると言う。野地¹⁶⁾も「学習ノートの再評価」が必要であると述べているが、児童生徒のノート指導に関する研究は少ない⁶⁾のである。

藤沢²⁾は、「授業中に生徒がノートを取ることはあまりにも当たり前の事と考えられ、従って、そ

の目的も方法も十分に検討が加えられていない」ため体系的とはいえずと述べ、大学生を対象にした調査から、小中高時代のノート指導の内容の多くが、教師の担当教科のページ内レイアウトであるため、「本人の工夫する可能性を広げる指導とは言えず、他の教科に応用できるような形ではない」と指摘している。

大坪・東畑¹⁶⁾は、小中学校教師に「ノート指導をする際に重視していること」を調査し、多くの教師は「思考の整理」を期待していると述べ、その理由は「児童生徒が自分の言葉で考えや意見を書き込んだり、メモや記録を参考にしながらまとめたりする《オリジナルのノートづくり》への発展を意図している」からであると述べる。しかし、「オリジナルなノートづくり」への発展としながらも、ノートをとる主体である児童生徒に教師は、「同型を求めたり作法を守らせたりする《要求》の意識が大きくはたら」いており、その理由は、「ていねいな文字や色使いに配慮が為され、バランスのとれた余白が復習時に利用しやすいノートであるという《見やすさ》を教師が重視している」ことによると考察している。つまり、教師は、児童生徒の自主的なノート学習を求めているとしても、ノートをとるための作法や教科の特定の型を指導することに終始しているというのである。

教師が意図する「オリジナルのノートづくり」のためには、大坪・東畑¹⁶⁾は、次年度の接続を意識した指導が必要であると述べているが、この対応が十分でないため、藤沢²⁾や大西³⁾が言う、ノート指導が体系的に行われていない状況をもたらしていると言える。

3 ノート指導の質的転換点を考える

山田¹⁷⁾は「ノートは、学習の備忘録、学習をまとめる等さまざまな働きかけがある。特に重視したいのは、『板書を写すノートから、思考するノート』への転換である。」と述べ、写すことから、活用するノートへの指導の質的転換が必要であると指摘している。

藤沢²⁾は実社会における情報処理能力を身に付けるためにも、情報処理教育にノート指導を位置づけるべきとして次のように述べている。

学習量や学習内容の体系性から考えて、ノート作成の指導は、中学生の時期から開始するのがよいと思われる。又、中学時代は筆記のスピードが急速に増加する時期であるし、社会に出てから役立つことも考え併せると、義務教育中に指導しておく必要があるため、やはり最適な時期は中学時代ということになるであろう。

ノート学習が、情報処理の基礎となるためには、板書を写すことから、学習内容を自分なりに整理して活用できるノートであることが大切で、そのためにも体系づけた指導が必要になる。そして教師がこのことをふまえる必要がある。

大学生を対象にした小中学校、および高等学校でのおよびノート指導に関する調査

小学校から行われているノート指導を、大学生はどのようにとらえているのであろうか。ノート指導の成果を確認していくために、平成24年度後学期開始直後に大学1年生を対象として、大学入学以前に受けてきたノート指導についてアンケート調査を行った。概要は次の通りである。

調査目的：大学入学までに受けてきたノート指導の実情と成果の把握

調査日 :平成24年10月4日

調査対象:茨城大学教育学部1年生111名

調査方法:選択または自由記述式によるアンケート調査

調査内容:①大学の授業で、ノートをとる際に気をつけている(こだわって)いることについて
②小学校から高校で受けてきたノート指導について

補注 授業時にメモを取ることも「ノートをとる」と考えて回答を求めた。

大学生を対象にした小中学校、および高等学校でのおよびノート指導の実態

大学生は小学校から高校までの間、どのようなノート指導を受けてきたのであろうか。

ノートやノートをとるに関する指導者の指示をすべて「ノート指導」ととらえて、「小中高の学習指導の中で、ノート指導を受けた経験はありますか。」の質問をしたところ、ノート指導を受けた「はい」と回答したものが81名、「いいえ」のノート指導を受けなかった回答者が29名、無回答が1名であった。このことから、ノート指導を受けたと回答した学習者は全体の約70パーセントになる。

次に、ノート指導を受けたと回答した81名に、小学校・中学校・高校でそれぞれどのような指導があったのか、自由記述による方式で回答を求めた(資料1・2)。以下にその結果をもとに考察する。

1 小学校で受けたノート指導について

小学校期に受けたノート指導について、自由記述による回答を求めたところ、日付を必ず書く、色の使い分け、といったことを指導されたという回答が多い。小学校では、ノートの基本的な書き方を学ばせ、そのことを定着させようという指導がされていることがわかる。

また、「授業の目標(めあて・問題・題)は青でまとめは赤で囲む」、「日付の欄を作り、必ず記入する」「大事なところは赤で書く」といった具体的な回答が多くあり、色分けすることで、ノート紙面を見やすくすることになり、それを実践していたことがうかがえる。小学校低学年から使用する「赤青鉛筆」も、大事な道具であるといえるだろう。

小学校期に受けた指導の特徴として、もう1点あげられるのが文字の書き方の指導で、「字は丁寧に書く」という回答である。後で見直してもわかりやすいように、文字を丁寧に書くことが大切で、この指導も大学生の記憶に残っているということになる。「文字を丁寧に」の指導は、小学校で最も多く、中学校、高校と進むにつれて少なくなる。ノートの目的をふまれば、読みやすくするための「丁寧に書く」ことは必須であり、中学校、高校で文字を丁寧に書かなくてもよいということではない。中学校以降のノート指導で、内容を構造的に表すことを優先するためにも、小学校で「文字を丁寧に書く」という指導が欠かせないのである。

2 中学校で受けたノート指導について

中学校期に受けたノート指導に関する記述が、他の時期に比べて多くなっており、特に、内容

に応じた形式に関する指導を受けたとする回答が増えている。ノートをとる目的を認識し、主体的に学習を行う中学校期における学習の在り方が学習内容の特性に合わせてわかりやすくノートにとる、という指導に反映されている。

具体的に受けた指導内容として、回答が多かったのは、「メモ欄をつくる」というものである。板書されたこと以外に、説明があったことやわからなかったことをメモしたり、予習や復習のために、「計算」「語句調べ」「(問題演習が)不正解だったときの解きなおし」を行ったりするために活用するものである。メモ欄については、計算をする欄として使うというだけでなく、演習問題の自分の解答を写す欄と教師の模範解答を写す欄を分けて記録するために活用する、という回答もみられ、何をメモ欄に書くのか、という指導も行われている。

中学校期になると、板書されたことだけでなく、大事であると思ったこともノートに記録する、語句調べや計算をするための欄をメモ欄として確保するといった指導を受け、それを実践し成果を実感していることがわかる。

3 高校で受けたノート指導について

高校では、科目数も増え、内容も専門的になるので、それぞれの教科ごとに指導を受けたという回答が多くなるが、中学校での指導をふまえたもの、または同様の内容のノート指導である。具体的なノートの形式を指示されたという回答が特に古典と英語に多かったが、古典と英語に限らず、教科の内容に合わせ、どのように予習・復習をするかの指導と付随して、ノートのとり方の指示されていたようである。ノートが内容理解のために欠かせないものであることを学習者自身が実感しているのであろう。このことがノートをとることの意義をより認識させることになる。予習・復習にも関連してくるので、ノート指導が学習習慣を確立するための手助けとなっていることもうかがえる。

4 その他のノート指導について

指導を受けた時期は不明であるものの、大学入学以前に受けたとするノート指導に関する回答に、「丁寧に素早く文字を書け」という指導を受けたという回答があった。この点について、現職教員に聞き取り調査を行ったところ、小学校高学年くらいから行われる指導内容であるという。小学校高学年になると、板書の量も増え、授業の進み方も早くなる。そのため、ノートをとる際に、「先生と同じくらいの速さで書いてね。」「中学校の先生はもっと早くなるよ。」などといった声かけをして、児童に早く書くことを習慣化させていくという。板書されないが、大事だと思うところを記録する上でも、「丁寧に素早く書く」は大事な指導である。この指導は、中学校のノート指導を円滑に進めるためには、大事な指導内容であり、この点の指導方法や支援の方法について、小中の連携が推進されるべきであろう。

5 大学生が受けてきたノート指導に関する考察

小学校でのノート指導は、色の使い方や文字を丁寧に書くこと、日付は必ず書くことなどノートをとる上での基本的な指導が中心になされている。小学校低学年での学習の実態からすれば、直前のノートを見直すことはあっても、単元を越えて以前のノートを見直すということはほとんど

ど行われない。なぜなら、その作業によってかえって学習内容が複雑になってしまうからである。しかし、この時期のノート指導の中心になる、「板書を写す」ことが、逆にノートは「板書を書き写すだけでいい」といった認識を学習者に与えてしまっている場合もある。大学生の回答にも「板書を写せばよい」という指導を受けたというものがあつた。とはいえ、高学年になると丁寧に速く書く指導とともに、板書されたこと以外のものもノートに書くことを指導されるようになる。日々の学校生活を通して児童に関わっている担任は、児童の学習状況に応じて、ノートの書き方もこまめに指導しているのである。

中学校になると、「メモ欄」を作るという指導が出現する。そのメモ欄には自分の気づいたこと、教師の口頭説明を書くものとして活用する。予習するための欄を作り、そこに予習をするように指導を受けたという回答もみられた。高校になると学習習慣を確立させるためのノート作りの指導が多くなる。教師側からの指導が減っていき、生徒が自分でノートをとることをうながすのである。

6 受けてきたノート指導をもとに大学生がノートをとる時に気をつけていること

ノートをとる習慣は身につけているものの、果たしてどのようなことに気をつけて、大学生はノートをとっているのであろうか。「ノートをとるときに、こだわりはありますか。」という質問をし、大学の授業でノートをとる際について、自由記述式で、回答を求めた。この結果について、考察する。

①色分けすることについて

色分けするという回答が非常に多く、「重要度によって色を分ける」や「色ペンは2色までしか使わない」などが回答として挙がっていた。小学校からのノート指導で色の使い方を指導されているが、色を使うことで、紙面が見やすく整理できることを実感している成果である。「色はあまり使わない」という回答も多くあり、多くの色を使うという工夫を試みたが、かえってわかりにくくなった体験をふまえてのものと予想され、色の使い方を通して、わかりやすい紙面を工夫してきたことがわかる。

②レイアウトについて

次に多く見られた回答はレイアウトに関するものである。「行間を広くとる」という回答が9名、「内容によって記録する場所を変える」という回答が4名、「字の大きさ」に関する回答と「書き出しをそろえる」という回答がそれぞれ3名ずつあつた。先行文献では、小学校期のノート指導が書く位置に関するものが多いという指摘があるが、紙面のどの位置に書くかということは、内容を構造的に示す上では大事なことであり、大学の授業であれば、内容の理解がないままでは構造的には書くことはできないのであるから、小学校での板書を写すノート学習を基盤にしつつ、大学生は考えてノートを書くという活動を行っていると言えよう。読みやすく整理してノートに書くためには配置の検討が必要であり、このことを意識した留意点である。

③こだわりとそのきっかけ

大学の授業でノートを取る際に気を付けている点を「こだわり」として聞いてみたが、そのき

っかけは、どのようなものなのであろうか。「こだわりを持つきっかけとなった出来事や教師からの指導などがありましたら、それも教えてください。」との問いを設定し、自由記述により回答してもらった。

まず、時期であるが「中学校から」と「高校から」という回答が同数で25名、「小学校から」が4名、「大学から」が3名という結果になった。これまでにアンケート結果にも表れていたように、中学校は児童生徒のノート学習に関する意識を形成する重要な時期である。というのも中学校では定期テストがある。この定期テストに向けて、授業のノートだけでなく、自主勉強で自分なりのノートを作ろうという意欲がでてくる。その際、わかりやすくという目的が、自分なりのこだわりとして表出するのだろう。中学校での指導を生徒はよく聞き、それを積極的に生かそうとする。高校では直接の指導は少ないものの、大学受験を控え、これまでの指導を生かした自分なりのノートを作る土台が完成しているの、より見やすく分かりやすいノートを作ろうとすることが予想される。

次に、こだわりが生まれたきっかけについてである。回答からそのきっかけは大きく分けて、「自分の意識で始めた」「教師・書籍がきっかけ」「友人がきっかけ」「受験がきっかけ」の4点である。この中で多かったのは、「自分の意識で始めた」である。「昔は色をたくさん使って綺麗なノートをとっていたが、ノートをとることに集中して授業が頭に入らない、見直してもごちゃごちゃして分かりにくかったので、自分で考えた。」という回答があり、わかりやすさを追求する結果、各自が自分なりに工夫して言った様子がうかがえる。

こだわりからは、学習内容を整理したノートを活用するという目的が、ノートをとる活動にあることがわかる。この活用に関する取り組みは、情報を整理して生かすという、情報処理である。自発的であれ、ノートをとることを通して情報を整理することの基礎的技能を培っている姿がうかがえる。

大学生を対象としたアンケート調査の結果を受けて

1 小学校期のノート指導をもとに中学校期のノートは情報処理のために「活用」がなされている

小学校期に受けたノート指導は、板書を写すことが中心である。特に低学年では、ノートをとる、というより、授業内容をわかりやすくまとめた板書を写すことで、ノートに何を書くかを学ぶ時期と言える。チョークで色分けされてまとめられた板書を写す際に、わかりやすく色を用いることを指導されたといった、具体的な内容の記述が多いのも、わかりやすく書くための方法を学ばせている結果である。中には「板書を写せばよい」といったことがノートをとることであったという回答もあるが、小学校で指導されるノートは、「板書を写す」ノートである。情報処理の基礎となる「考えるノート」への転換期は主に中学校でなされることになる。

「考えるノート」にするための具体的な指導が、板書されたこと以外に口頭で説明されたことや新しい単語等を書くことが求められ、そのためのメモ欄の設定がある。内容を理解するだけでなく理解したことを書き表すことができるよう、メモ欄を活用するのである。

言い換えれば、中学校での定期試験に活用するために、授業内容という情報を整理する必要が生じるのである。小学校期でも、ノートを見直す、といった活動はあるが、その多くが教師にうなが

されて行くものである。これに比べ中学校でのノートを見直す活動は、まさに情報を整理したものを活用することであり、そのことを意図してノートをとっており、小学校でのノートの生かし方とは異なっているのである。

回答者の自由記述から、ノート指導に関し小学校期から中学校期では、写すから活用するノートに転換していることがうかがえる。

2 中学校期のノート指導の課題

ノートをとる際の自分なりの工夫点について、こだわりという言葉で問いを設定したが、こだわることになった時期については、大半が中学校以降であると回答しており、活用するためノートをとることを自覚し始めた時期と重なっている。

板書は教師が授業内容をわかりやすくまとめたものであり、その板書をノートに写すという小学校期の学習体験は、学習内容をわかりやすく書くための方法を学んでいるのである。こういった体験をもとに、各教科の内容に応じたノートのとり方を学んでいくのが中学校期である。小学校に比べて、より専門的な内容をわかりやすくまとめていく方法を中学校になってから学ぶとともに、自身の工夫も加えていくのである。

自分なりの工夫というこだわりをし始めた時期について、「中学校位から。授業のスピードや先生の説明の多さに授業内で綺麗に書くことは不可であると気がついたため。」、また、「中1のときにノートの取り方は人それぞれと知った。それから工夫をするようになった。見やすさを考えたのは受験時。」という記述があった。

中学校では小学校に比べ、授業の進度が早くなり学習量も増え、これに対応するために、教科ごとに対応したノートの使い方やメモ欄の活用といったノート指導がなされ、学習者の工夫がうながされており、この二つの記述からは、学習者が主体的にわかりやすいノートをとろうとしている姿がうかがえる。一方、学習者の主体的な取り組みによるもののみで、学習者の工夫に対し、教師がどのように点検、評価しているかについての記述がみられなかったことから、教師がノートの型を提示することに終始し、段階に応じた具体的な指導が充分ではない状況も推察される。学習者の主体的な取り組みをうながす方法について、教師間での検討も必要である。

おわりに

大学生を対象にした小中学校で受けたノートの指導に関する調査から、具体的にどのような指導を受けてきたかについて明らかにすることができた。実際に小中学校の指導者はわかりやすくノートを書くためのノート指導を行っているが、目の前にあるものを書き写したり、口頭で説明されたものを書きとめたりする力を養うためのものが中心となっている。

中学校期のノート指導に、メモ欄を作るというものがあり、口頭で説明があったものを記録する欄として活用することをねらいにしている。しかしメモ欄を作ったからといって、すぐに書けるわけではない。内容を理解し、ノートに書く位置や大きさ、筆記用具を選別しながら書くことが求められるため、授業に慣れてから徐々にメモ欄に書き込みができるようになるのである。聞き取り調

査によれば、この時期の中学生の実態を確認してみると、中学校入学直後から、メモ欄を活用できる生徒は少ない、とのことである。中学校入学直後にノートをとることを面倒と思わないよう、配慮が必要であり、中学校入学後の指導が重要である。

ノート学習そのものは、学習内容を整理して書くという活動であり、このことはノート学習が情報を整理するという基礎技能の育成に関わっている。小学校でも、自分の考えを書くというノート指導は行われ、中学校では、さらにその機会が増す。学習内容を理解しながら、自分の考えをまとめ記録していく活動は、情報を整理するという点でも欠かせない活動である。大学生を対象にした調査から、内容理解のためにノートを整理し、活用するという取り組みを自主的に主体的に行っている様子うかがえたが、この取り組みそのものが情報処理の基礎になっているとの意識はないようである。

冒頭で引用した大沢の指摘する、個々の教科に特化したノート指導から、ノートをとることが、実社会に出た時に情報を整理する技能の基盤になっているという視点をもふまえたノート指導が必要である。そのためにも、ノート学習が単に授業の内容理解にとどまらない技能の修得につながっていることを、指導者が認識し、情報を共有していくことが大切である。

注

- 1)花田修一『書くこと』の授業改革 ―情報化対応の作文技術― (明治図書, 1999) p.93-96.
- 2)藤沢伸介「中学生に対するノート指導の必要性について」『研究報告1』(跡見学園女子大学 一般教育, 1985), pp.1-9.
- 3)大西道雄「学習情報の処理・創造技術・方法としてのノート指導技術・方法を」『教育科学/国語教育』, No.488(明治図書, 1994), p.72
- 4)宮川利三郎「学習指導における問題点―小学校の場合―」飛田多喜雄 野地潤家監修 深川明子編集『国語教育基本論文集成第27巻 国語教育方法論(4) 教育技術論』(明治図書, 1993)p.332.
- 5)石上佐和子「学びを創る『ノート』の在り方に関する研究～『ノート』の史的変遷を踏まえて～」『全国大学国語教育学会発表要旨集 120』, (全国大学国語教育学会 2011), pp.215-218.
- 6)大坪治彦・東畑貴昭「教師の板書計画とノート指導に関する一考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要.教育科学編』(2012)pp.107-127.
- 7)栗原昭雄 山下直子 草野啓頭 竹下真生 鈴木幸「家庭学習・学習習慣・学習意欲の育成とノート指導(1)」『研究論叢 芸術・体育・教育・心理』56(3) (山口大学, 2007), pp.229-243.
草野啓頭 山下直子 栗原昭雄 竹下真生 鈴木幸「家庭学習・学習習慣・学習意欲の育成とノート指導(2)」『研究論叢 芸術・体育・教育・心理』56(3) (山口大学, 2007), pp.245-260.
- 8)金澤鉄也「授業と家庭学習をつなぐノート指導に関する実践的研究」『全国大学国語教育学会発表要旨集』105 (全国大学国語教育学会 2003), pp.155-158.
- 9)松野孝雄「ノートの三つの機能」『教育科学/国語教育』, No.650(明治図書, 2004), p.23.
- 10)西村嘉人「学習ノートに『記録』『思考』『評価』の機能を」『教育科学/国語教育』, No.650 (明治図書, 2004), pp. 50-52.

- 11) 宇我部義則「ノートの取り方を指導しつつ、工夫を引き出していく」『教育科学／国語教育』, No.650(明治図書, 2004), p.62-64.
野地潤家「学習ノートの再評価」『教育科学／国語教育』 No.195(明治図書, 1974)p.10
- 12) 石田佐久馬『国語科授業の基礎・基本 子どもが生きるノートづくりの工夫』(東洋館出版, 2001)p.43.
- 13) 大磯宏「ノートを作り上げる喜びを」『教育科学／国語教育』 No.488(明治図書, 1994)p.77.
- 14) 浅野秀之「6年『外来語と日本文化』での事例」『教育科学／国語教育 2001年11月号』No.613(明治図書, 2001)p.72-74.
鶴本百合子「書き方を教え、評定する」『教育科学／国語教育』 No.650(明治図書, 2004)p.65-67.
松藤司「基本をしっかり、発展は授業の一コマにある」『教育科学／国語教育』 No.650(明治図書, 2004)p.74-76.
- 15) 河田孝文「ノート活用の型を教えることで、国語力は伸びる」『教育科学／国語教育』 No.650(明治図書, 2004), p. 44-46.
- 16) 野地潤家「学習ノートの再評価」『教育科学／国語教育』 No.195(明治図書, 1974)p.10.
- 17) 山田一「子どもの思考の足跡を見取る」『教育科学／国語教育』 No.650(明治図書, 2004), p.77-79.

資料1 自由記述による小中学校及び高等学校で受けたノート指導について

○小中高の学習指導の中で、ノート指導を受けた回答したもの(111名中)

はい…81 いいえ…29 無回答… 1

○上記のノート指導を受けたとする回答者(81名)が記述した内容について

小学校期に受けたノート指導の内容とその回答例

- ①色を使ってわかりやすく書くこと(目標は青、まとめは赤)(回答者数 20)
 - ・基本的な書き方(めあては青で囲む、大事なところは赤で書くなど)。
 - ・大事なことは赤ペンで書く。・大切なところは文字色を変えるようにという指導を受けた。
 - ・黄色のチョークは赤でノートに写す。・目標などを赤や青で書きこむ。
- ②ノートに書く文字について(回答数 13)
 - ・自分だけが分かるような文字ではなく、他人も分かるような文字でノートを書く。
 - ・習った漢字を積極的に使う。
 - ・板書を見ながら書かない。・鉛筆の持ち方。・鉛筆で書く(低学年。)
- ③日付の書き方や形式について(回答数 7)
 - ・線を引いて狭い欄のほうに問題番号や日付を書くようにする。・日付を必ず書く
- ④余白をとる(回答者数 6)
 - ・適当な空白を開けるようにという指導を受けた。・単元が変わったらページを改める。
- ⑤板書を写す(回答者数 3)
 - ・板書に忠実にかく。・板書さえ取ればいい。
- ⑥教科特有のもの

算数(回答者数 11)

- ・途中式はしっかりかくこと。
- ・算数ではノートの左側にスペースを作り、そこに日付やひっ算をする。

国語について(回答者数 7)

- ・国語は縦書き、他は横書き
- ・国語は下のほうに何センチかに線を引く、メモ欄を作る

⑦その他 使用するノートやレイアウト等について

- ・マス目の空いているノートを使用する(教科によって指定されていた)。
- ・小1…板書のまま書く 小4…今までのノートをためていく場所を設置。1年たった時に札数を数え、中身を見してみる。
- ・プリントの貼り方。
- ・基本的にノートに書きこむ、教科書は先生が指示したとき以外は書かない

中学校に受けたノート指導の内容とその回答例(回答者数 62)

①教科ごとの形式に関する指導(内容に応じた欄に書く、メモ欄をつくる)(回答者数 34)

- ・ノートの端5センチ程の感覚で線を引く、その線の右側には自分が重要だと思ったことを、左側には授業で板書されたものを書きなさいと指導された記憶があります
- ・どの教科もノートにメモ欄を作るように言われた
- ・1年生の時に英語のノートのとり方を指導された
- ・国語の先生にノートは100円程度のものであるからケチケチせずに使えと言われた。社会の先生にノートは半分に切って(分けて)使えと言われました。
- ・数学の授業では、黄色のチョークが赤で、赤色のチョークが青でノートに写す。それ以外は小学校と一緒に(黄色→赤、赤色→青)数学では授業の板書は右ページを使い左ページは復習として自習ページとして使っていた。
- ・社会の授業で、A4サイズの配布資料が多かったので、A4サイズのノートを使うようにという指導。
- ・理科のときメモを書くスペースを線を引いて右側に作るように言われた。
- ・英語のノートは見開き1ページで1つの区切りにする。

②見やすくする工夫(色や余白 図をもちいる)をするように(回答者数 19)

- ・ノートを見やすくするために、色を分けたりラインを引くようにする。
- ・綺麗なノートの作るのではなく、後で見直して分かるようにノートをとる。
- ・板書のほかに、先生が口頭で言ったことに関して、色ペンでノートに書きこむ。
- ・色ペンを使いすぎない(色の種類を少なくする)。
- ・図を用いてノートにまとめる。
- ・(入試に向けて)図形はフリーハンドで書け 直線や図形はフリーハンドで書く。
- ・ノートは大きく使う(字間を空ける・字は見やすい大きさに)。

③板書以外も書く回答者数 4)

- ・板書だけでなく、先生が言ったことをなるべくすべてノートに取る。

④その他

- ・数学の図形は大きめに書く。 3名
- ・国語のノートは鉛筆で書くこと。1名
- ・レジュメを貼る時にはスティックのりを使う。1名

高校時代具体的なノート指導があったと回答した者 40名(回答例略)

時期不明だが、ノート指導があったというもの(回答者数 12)

- ・ノートをとる時には、丁寧さも大事だが素早さも大事だ。丁寧にすばやく文字を書け。
- ・自分なりのノートのルールを作る。
- ・色ペンを使いすぎない。
- ・書き出しの位置を揃える。
- ・黒板に書いた説明以外のものも書きこんでおく(自分で調べたもの、気づいたもの等)。

資料2 ノートをとる時の自分なりの「こだわり」について(回答者数 63)

①色分けをする(回答者数 21)

- ・板書と同じ色をできるだけ使う 関連したイラストを入れる。
- ・色ペンに重要度 口頭でのことを自分でまとめる。
- ・大切なところは赤 少し書いておいたほうがよいなと思ったところはオレンジ、何が何でも覚えなくてはいけないところは青(基本3色しか使わない)。

②色は使わない(回答者数 12)

- ・色ペンは赤のみ ほとんど色ペンは使わないで黒で書く 矢印や線を使って強調する。
- ・色ペンは2色程度蛍光ペンは1つのみ。
- ・大切なことは丸で囲む 色はあまり使わない。

③板書されたことは書く(回答者数 8)

- ・できるだけ板書をそのままの形で書き写す。
- ・板書はなるべく隙間を空けて書くその間にメモや先生の口頭で言った大切なことを書く。
- ・板書を丸ごと写す場所、口頭説明を書く場所を分けて書く。

④メモ欄をつくる(回答者数 5)

- ・メモ欄を作る。
- ・板書を写すところのほかに、自由記述のスペースの作る。
- ・余裕を持たせて書く(詰めすぎない)。

⑤その他(回答者数 27)

- ・同じ内容はできるだけ同じページに書く。
- ・自分が調べた内容も書いておく。
- ・本当に大事だと自分が思ったことだけ板書。
- ・先生が説明していることを頭で整理してまとめて自分の言葉で書いてみる。追加点があれば吹き

出しで書く。

- ・板書以外のことはまるでさっと囲む。授業中はとにかく書いて後で綺麗に書きなおす。
- ・授業の際は多くのことをメモしておき家に帰ってから自宅学習用のノートにまとめなおす。

資料3 ノートをとる時の自分なりの「こだわり」を持つようになった時期 (回答者数 60)

小学校から(回答者数 5)

- ・小学校で友達がやっていたやり方がキレイなとり方だったので。
- ・小学校のときに赤ペン、青ペンを使って色分けをしてノートをとる指導を受けたのがきっかけです。

中学校から(回答者数 23 このうち中3からの回答者数 6)

- ・中学校位から 授業のスピードや先生の説明の多さに授業内で綺麗に書くことは不可であると気がついたため。
- ・中学の時から。ノートを綺麗に書くと、復習しやすく、1回で頭に入りやすいと言われたから。
- ・中学頃から。イラストを入れると復習するときに授業の内容を思い出しやすかったから。
- ・高校受験の時に、学校の授業のノートとは別にまとめ用ノートを作ってまとめ作業をするようになってから。
- ・中1のときにノートの取り方は人それぞれと知った。それから工夫をするようになった。見やすさを考えたのは受験時。
- ・中学校か高校頃。板書が汚い先生がいたので、どうやったら分かりやすくノートを作れるか考えた結果こうなった。

高校から(回答者数 25)

- ・高校に板書で何種類もの色を使う教師がいたため。
- ・高校から。余計な知識と必要な知識の区別ができるようになったから。
- ・高校時代 自分のノートのみづらさに気付いた時。
- ・高校から、自分なりのノートにしようと思って受験期に。
- ・高校 友達のノートを見た時に分かりやすいなと思ったから。

大学から(回答者数 3)

- ・大学に入って教科書を使わない授業が増えてきたので、自分のノートしかテスト前に頼れるものがなくなったのがきっかけです。
- ・大学から。自分で見ていてチカチカするので自分で決めた。

その他(時期ははっきりしない 回答者数 5)

- ・昔は色をたくさん使って綺麗なノートをとっていたが、ノートをとることに集中して授業が頭に入らない、見直してもごちゃごちゃして分かりにくかったので、自分で考えた
- ・テストでノートを見直す時に印象に残るから。